



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係
Author(s)	斎藤, 早香枝
Citation	北海道大学医療技術短期大学部紀要, 11, 19-25
Issue Date	1998-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37638
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_19-26.pdf



原 著

子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係

斎藤早香枝

Maternal Perception about Her Own Infant's Temperament and Infant-Mother Attachment

Sakae Saitoh

Abstract

The purpose of this study was to investigate a mother's perception of her infant's temperament and what effect this perception has regarding future infant-mother attachment. Moreover, the correlation between infant's temperament and mother's confidence pertaining to child care was examined.

For this study we administered a questionnaire to the mothers of 10 month old infants to find out each mother's perceptions of their child's temperament. We then evaluated the infant-mother relationship using the attachment Q-sort (AQS) when the infants were 18 months. Results showed that mother's perception of their infant's temperament at 10 months had a significant effect on how confident she was in caring for her child at 16 months. However, the infant-mother attachment had little or no correlation with the way she perceived her infant's temperament. Although when a mother's negative perception of her infant was combined with little help from the family members, AQS scores were lower. These results imply that if a mother's negative perception of her infant's temperament is combined with poor family support the results could be insecure infant-mother attachment.

Key Words: attachment, infant temperament, infant-mother relationship

要 旨

子どもと関わる母親にとって子どもの気質的特性がどのように受けとめられているのかという母親の主観に注目し、わが子の気質の特徴に対する母親の認識とその後の母子関係を、愛着

の形成という側面から検討した。さらに、母親の認識と育児に対する母親の自信との関連、家族関係との関連も検討した。

結果は、生後10ヵ月時に、母親がわが子に対し、気質的に難しい、あるいは、手がかかるという認識をもっている場合、16ヵ月時の育児に

北海道大学医療技術短期大学部看護学科

Department of Nursing, College of Medical Technology, Hokkaido University

対する自信の低下がみられた。一方、母親のもつ乳児の気質的懸念と18ヵ月時のQソートによる愛着の得点との間に直接的な関係はなかった。しかし、家族関係との組み合わせで、比較した結果、気質的に難しく、かつ、家族関係にも問題がある場合に最も愛着の得点が低く、他のマイナス要素と重複することでの、愛着形成への影響が考えられた。

キーワード：愛着 乳児の気質 母子関係

I はじめに

母子関係研究の中で、子どもの気質的特性と母親の育児ストレスとの関連を取り上げたものは多くみられるが、子どもの発達という視点から愛着形成への影響を検討したものは、非常に少ない。愛着理論では、幼少時期のさまざまな情動表出に際して、養育者から適切な応答を繰り返し安定して受けることによって、安定した関係性の表象が形成され、それが生涯にわたって個人の情動制御の方略や行動様式に作用すると考えられている(Bowlby, 1988)が、情動表出の内容や頻度に関わる子どもの気質的特性が母親の介入に影響をもたらす、結果として子どもの愛着形成に影響を与えることは十分に考えられる。田村(1988)は、新生児期に泣きが多く、なだまり難い子どもをもった母親は、乳児期に子どもが泣いた時、介入するまでの時間が、他の子どもの母親より長く、介入が遅くなる傾向にあるという報告をしている。

一方、近年の気質研究では、従来の、気質の基本特性は変化しないものとする考え方に対し、気質的特性も養育者の対応や環境によって多様に発達するものといった関係性の中で気質を捉えようという動きが盛んになってきている中で、母子の愛着の形成要因として気質を取り上げたもののほとんどが、子どもの気質を新生児期という生後の早い時期に査定したものと

どまっている。

そこで、本研究は、子どもと関わる母親にとって子どもの気質的特性がどのように受けとめられているのかという母親の主観に注目し、わが子の気質の特徴に対する母親の認識とその後の母子関係を、愛着の形成という側面から検討するものである。さらに、それらと育児に対する母親の自信との関連、育児に対するサポートとの関連をもあわせてみるものである。

検討される仮説は、以下の通りである。

- 1 母親の認識する乳児の気質は、のちの母子愛着関係に影響する。
- 2 母親の認識する乳児の気質は、育児に対する自信に影響する。

II 方 法

1 対 象 者

本研究は、母子の縦断的研究への協力を依頼し、家庭もしくは実験室での観察、子どもの気質や母子関係に関する調査などを縦断的に行ってきたうちの、生後10ヵ月時と16ヵ月時の乳児の気質の特徴についての母親の認識と、16ヵ月時の母親の育児に対する自信と育児に関する家族との関係、18ヵ月時の母子の愛着関係の調査のデータを用いている。

対象者は、保健所での4ヵ月検診時に募集され、札幌市在住の第1子を養育中の母親45名が参加した。今回は、そのうち、生後10ヵ月時、16ヵ月の調査と18ヵ月時の家庭訪問すべてに参加した37組について報告する。被験者の属性は表1に示すとおりである。母親の平均年齢は、29.7歳で、一組を除きほとんどが核家族であった。また、対象児には、妊娠・分娩時においてその後の発達に問題となるような異常はなかった。

2 手 続 き

- 1) 子どもの気質的難しさと育児の自信の喪失に関する調査

表 1 対象者の属性

母の年齢	平均 29.7 歳 (22~44)
母の学歴	中卒 2.7% 高卒 37.8% 短大・専門学校卒 51.4% 大卒 8.1%
母の就労状況	生後 10ヶ月時 専業主婦 35 名 (94.6%) 有職者 2 名 (5.4%) 生後 18ヶ月時 専業主婦 31 名 (83.8%) 有職者 6 名 (16.2%)
配偶者の年齢	平均 32.6 歳 (23~45)
配偶者の学歴	高卒 43.2% 短大・専門学校卒 18.9% 大卒 35.1% 大学院卒 2.7%
家族形態	核家族 36 組 複合家族 1 組
世帯収入	250~500 万 67.6% 500~750 万 16.2% 750 万以上 16.2%
対象児の生年月日	1995 年 11 月~1996 年 2 月
性別	男 17 名 (46.0%) 女 20 名 (54.0%)
母親の母の年齢	平均 57.4 歳 (45~75)

(1) 調査時期と対象児の月齢

「子どもの気質的難しさ」に関しては、2 回行われた。1 回目は、1996 年 9 月中旬~12 月上旬で、対象児の月齢は、平均生後 10.2 ヶ月 (9 ヶ月~11 ヶ月)、2 回目は、1997 年 3 月中旬~6 月中旬に実施され、児の平均月齢は 16.2 ヶ月 (15 ヶ月~18 ヶ月) であった。2 回目の調査時には、併せて、「育児に対する自信の喪失」について、「家族との関係」の調査が実施された。

(2) 調査用具と手続き

母親の子どもの気質に対する認識と育児、家族との関係に関する認識は、Parenting Stress Index (PSI) (Abidin, R.R., 1979) の日本語版、関西学院 Parenting Stress Index (KGPSI) (野沢, 1988, 1989) の一部を用いて調査した。具体的には、生後 6 ヶ月から 1 歳 8 ヶ月の子どもを持つ母親 388 名を対象にした先行研究(藤井, 1994)で得られた 6 因子 62 項目より、第 1 因子である「親としての自信のなさ」11 項目、第 2 因子「子どもの行動特徴に関する懸念」15 項目と、第 4 因子「配偶者の非協力・家族との対立」から 5 項目を採用した。子どもの気質的特性は、生後 10 ヶ月時の来所時と生後 16 ヶ月に家庭訪問をした際に、育児の自信と家族との関係に関しては、生後 16 ヶ月時の家庭訪問時に、「よくあてはまる」(5 点)から「全くあてはまらない」(1 点)の 5 件法で質問紙に回答してもらった。母親が、子どもの気質的特性に対してネガティ

ブな認識をもつほど、また、育児に対する自信がもてない場合ほど得点が高くなる設定である。

2) 母子の愛着関係に関して

(1) 調査時期と対象児の月齢

1997 年 5 月中旬~9 月上旬にかけて実施した。対象児の月齢は、平均 18.8 ヶ月 (18 ヶ月~20 ヶ月) であった。

(2) 調査用具と手続き

母子関係に関しては、愛着関係の安定性という視点より、愛着の Q ソート法 (AQS) を使用した (Waters & Deane, 1985)。生後 18 ヶ月時に発達心理学を学ぶ大学院生 2 名ないし 1 名が家庭訪問し、日常場面を観察、評定した。訪問に先駆けパイロットによる AQS の訓練を行い、訪問者 2 名の評定の相関が .80 に達してから実際の訪問を行った。基本的には、母親に日常いつものように過ごしてもらう中で子どもの行動の観察を中心に行ったが、短時間で効果的な観察結果を得るために、訪問中母親に子どものいる部屋からの一時的な自然な退室を依頼したり、持参した動くおもちゃに対する反応をみるといった半構造化された訪問を行った。また、実際に観察することが困難な項目に関しては、母親への質問により補った。所要時間は 1 ケースにつき約 2 時間から 2 時間半であった。観察された結果の分類と標準分類との相関を出

表2 気質的特徴と家族関係の認識とQソート値の平均

家族関係の問題	10ヶ月時の気質的難しさ			
	高		低	
	高 (n=10)	低 (n=9)	高 (n=6)	低 (n=12)
Z変換後の Qソート値の平均	.386	.491	.566	.562
(SD)	(.111)	(.107)	(.073)	(.103)

し、それを Fisher's r-to-z で変換した数値を個々の愛着関係の得点とした。得点が高いほど、安定した愛着関係を意味する。

3 分 析

それぞれの結果は、StatView を用いて統計処理された。

III 結 果

1 基本統計量

1) 子どもの気質的難しさに関する母親の認識
子どもの気質的難しさに関する得点の平均は、10ヵ月時 34.8 (SD 9.2), 16ヵ月時 38.3 (SD 10.7) であった。生後 10ヵ月時と 16ヵ月時の得点の間には、高い相関関係がみられた ($r = .69$, $P < .0001$)。

2) 育児の自信の喪失と家族関係

生後 16ヵ月時の育児に対する自信の得点の平均は、32.0 (SD 7.4) であった。また、家族との関係の得点の平均は、14.7 (SD 3.3) であった。

3) 愛着のQソート

愛着のQソート値は、 $-.230 \sim .799$ に分布し、中央値は、.477 であった。Z変換後の値は、 $-.234 \sim 1.077$ に分布し、平均は .498 であった。母親の年齢、児の性別、出生時体重、在胎週数によるQソート値の違いは、みられなかった。

2 乳児期の気質的特徴と母親の育児に対する自信

乳児期の気質的特徴の育児への影響を検討するため、乳児期の気質的特徴の得点を平均値より高低2群に分け、6ヵ月後の育児に対する自信得点の平均値を比較した。気質得点が高いグループの平均得点は 35.53, 低いグループの平均得点は 28.28 であり、t検定の結果、両者の差は、有意であった ($t(35) = 3.389$, $P < .05$)。すなわち、10ヵ月時に自分の子どもが気質的に難しいと母親が認識している場合、16ヵ月時に育児に対する自信をなくしやすいことが示された。

3 乳児期の気質的特徴と母子愛着関係

乳児期の気質的特徴と8ヵ月後の母子の愛着関係との関連をみるために、気質得点の高低による愛着のQソート値の平均を比較したが、有意な差はみられなかった ($t(35) = -1.224$,)。次に、他の因子との複合的な影響を検討するため、10ヵ月時の気質要因と16ヵ月時の家族要因を組み合わせてQソート値を比較したのが表2、図1である。気質得点が高く、かつ家族得点が高い場合、すなわち、10ヵ月時の気質的特徴が難しいタイプで、かつ、家族との関係にも問題を抱えている場合に最もQソートの得点が低く示された。

IV 考 察

子どもの気質得点が高い場合、育児の自信のなさが高くなることから、子どもの気質を難し

子どもの気質に関する母親の認識と母子愛着関係

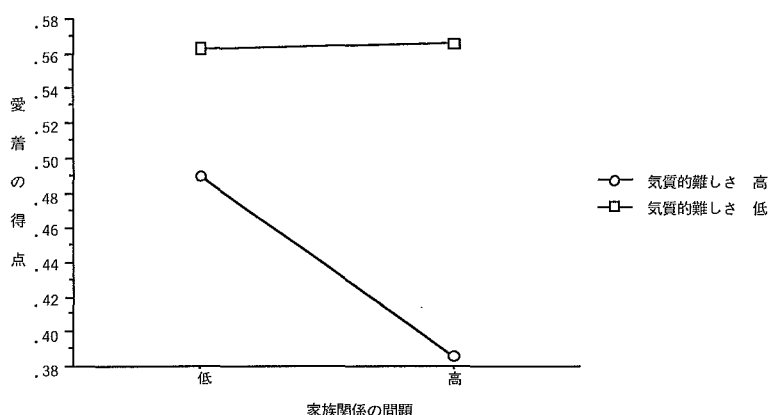


図1 気質の特徴と家族関係の認識と愛着の得点

い、扱いにくいと感じている母親は、育児に対する自信を持ちにくいといえる。このような子どもの気質的特徴と育児ストレスとの関連は、これまでに報告があり、今回の結果もそれを支持するものであった。子どものジストレスの表出の頻度が高く、母親の介入によってもジストレスな状況が容易に解消されない場合、あるいは、ジストレスの原因を特定することが難しい場合、母親は、子どもを「扱いにくい」「手がかかる」と考えやすく、また、対処に費やす時間とエネルギーの割に、関わりの有効性を実感できないため、自己効力感をもてずに、育児に対する自信を喪失しやすくなる。また、こうした子どもの気質的特徴に対する認識は、時間の経過を追ってみても大きく変化する事がないことが報告されており（水野 1998, Lee & Bate 1985）、本研究でも、10ヵ月時の母親の認識と16ヵ月時の認識との間に高い相関関係がみられた。

子どものジストレスな状態が多く、また容易になだまりにくいという状況は、母親にとって非常にストレスとなり、程度によっては、二次的に育児不安や育児ノイローゼを引き起こす可能性もある（佐藤ら 1994）。こうした育児不安に関しては、サポートシステムの有効性が数多く報告されている。

では、子どものこうした気質的な問題は、愛着形成という観点からみるとどのような影響を与えるのであろうか。扱いにくい子どもをもった場合、養育行動に関しての効力感が少なく、養育行動の動因が低下することが考えられ、その結果として愛着形成に影響を与えることが考えられたが、今回の結果からは、母親に子どもの気質的特徴に対するネガティブな認識があっても直接的には母子の愛着関係との関連はみいだされなかった。

愛着の形成は、養育者と子どもとの二者間の相互作用の産物であり、二者間の関係性の質の反映であると考えられている。そして、それは、養育者の感度の良い調節機能に多く依存している。従って、手がかかっても、その子どもの欲求や情動表出を汲み取って、応答的に対応するかどうかの問題なのであり、今回の結果からは、気質それ一要因では、愛着の形成を妨げるほどの影響を与えないようだった。そこで、次に、気質的要因と家族的要因を組み合わせ、検討したところ、気質に対する懸念があり、かつ、家族に対する不満足が高い場合、他よりも愛着のQソート値が低かったことから、気質的に難しい子どもをもち、かつ家族からのサポートが十分でない場合に、不安定な愛着関係を築く可能性があることがうかがえた。これは、サンプル

ル数が少なく、統計的に証明するまでには至らなかったが、養育者を取りまく育児環境、ストレス、などは、複雑に絡み合いながらケアの質に影響し、結果的に愛着関係に影響することが考えられる。Crockenberg(1981)は、愛着の縦断研究の中で、十分な社会的サポートを得られない家庭環境で、気質的に難しい乳児が、応答性の良くない養育を受けると、不安定な愛着を形成する傾向のあることを報告している。また、子どもの気質的特徴が、養育面に与える影響は、母親の特性に依存すること、扱いにくい子どもをもつ母親の応答性は、社会的サポートによって変化しようと述べている。

乳児の気質的特徴のマイナス面は、他の要因との複合的な関係の中で、母子の愛着関係へ影響する可能性はあるが、扱いにくい子どもをもったというだけで、不安定な愛着を形成するということにはならない。従って、今後の研究は、さまざまな要因が、どのように関連すると、母親の行動にどのように影響するのかという相互作用場面での行動レベルでの影響を検討する必要がある。一方で、気質的に難しい子どもを養育し、育児の自信をなくしかけても、愛着の形成のために維持されている、子どもの愛着形成の核となる母親の行動の解明も今後の課題といえる。

引用文献

- 1) Abidin, R. R.: Parenting Stress Index Manual. Pediatric Psychology Press, 1983.
- 2) Bowlby, J.: A Secure Base: Clinical Applications of Attachment theory. London: Tavistock/Routledge, 1988.
- 3) Crockenberg, S. B.: Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. Child Development, 52: 857-865, 1981.
- 4) 藤井まな: Parental bond に関する基礎的研究—育児ストレスとの関連性—. 教育学科研究年報, 20: 89-103, 1994.
- 5) 数井みゆき: 親役割ストレス・夫婦関係・親子関係の父母比較—家族システムの視点に立つて—. 家庭教育研究所紀要 17: 73-83, 1995.
- 6) 近藤清美: 乳幼児におけるアタッチメント研究の動向とQ分類法によるアタッチメントの測定. 発達心理学研究, 4: 108-116, 1993.
- 7) 久保田まり: アタッチメントの研究: 内的ワーキングモデルの形成と発達. 川島書店, 1995.
- 8) Lee, L. C., & Bate, J. E.: Mother-child interaction at age two years and perceived difficult temperament. Child Development, 56: 1314-1325, 1985.
- 9) 牧野カツコ: 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉 家庭教育研究所紀要 3: 34-56, 1981.
- 10) 水野里恵: 乳児期の子どもの気質・母親の分離不安と後の育児ストレスとの関連: 第1子を対象にした乳幼児の縦断研究 発達心理学研究 9: 56-65, 1998.
- 11) 野沢みつえ: Parenthood に関する基礎的研究—Parenting Stress Index 翻訳の検討— 日本教育心理学会 30 回総会論文集, 442-443, 1988.
- 12) 野沢みつえ: 親業ストレスに関する基礎的研究 関西学院大学院研究科年報, 15: 35-56, 1989.
- 13) 佐藤達也・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則: 育児に関連するストレスとその抑鬱重症度との関連 心理学研究 64: 409-416, 1994.
- 14) 田村あおい: 乳児の泣きの特徴が養育行動に及ぼす影響について 北海道大学教育学部紀要 50: 131-137, 1988.
- 15) Waters, E., & Deane, K. E.: Defining and assessing individual differences in attachment relationship: Q-methodology and the organization of behavior in infancy and early childhood. In I. Bretherton & E. Waters (Eds), Growing points in attachment theory and research. Monographs for the Society for Research in Child Development, 50, 41-65, 1985.

〈付録資料〉

〈1 親としての自信のなさ〉

- ・自分自身，親の役割を十分はたしていないのではないかとすることがある。
- ・子どもをいろいろしつけてきたが，だいたいうまくいっていると思う。*
- ・子どものどんな問題にでも親として対処できるか自身がない。
- ・自分は親として少し問題があるのではないかとすることがある。
- ・子どもが何をして欲しがっているのかがつかめなくて，いらいらすることがある。
- ・やっとしつけができたと思っても，ちょっとしたことですぐ逆戻りするのでがっかりすることが多い。
- ・親としてやっていくのは，予想していた以上に難しい。
- ・子どもが聞き分けがなかったり，ひどくむずがったりすると自分の育て方が悪かったのではと思ってしまう。
- ・子どもの心の動きのすみずみまでわかってやれるようになるのはとても難しい。
- ・母親としてしつけや教育のすべてをまかされるのは，私にとって負担が大きすぎる。
- ・子どもを育てていく上で，どうしつけたらよいのかわからなくなる。

〈2 子どもの行動特徴に関する懸念〉

- ・よその子に比べて，泣いたりわめいたりだだをこねることが多い。
- ・この子は，何か欲しいとなると，すぐに聞き分けがなくなってしまう。
- ・かんしゃくをおこすと，なだめる方法がないほど激しくむずがることが多い。
- ・気に入らないことがあると，すぐにすねたり，しよげかえったりする。
- ・ところかまわず聞き分けをなくすので困ることが多い。
- ・いったんだだをこね始めると思い通りになるまでだだをこね続ける。
- ・泣いたり，ぐずついたりし始めると，いつまでたっても泣きやまないことが多い。
- ・ちょっとしたことで機嫌がころころと変わりやすい。
- ・よその子どもよりも，育てにくいのではないかとすることがある。
- ・こちらの思惑で何かをさせたり，やめさせたりするのはとても難しい。
- ・よその子に比べて，落ち着きがない。
- ・親の私がまいってしまうほど，この子は，ほんのしばらくの間もじっとしていない。
- ・ほかの子に比べひとつのことに注意を集中したり，興味を持ち続けるのがにがてのようである。
- ・一人遊びをさせようとしても，ほんの10分ももたない。
- ・環境や生活のちょっとした変化でも，なじませるのがとても時間がかかる。

〈3 配偶者の非協力・家族との対立〉

- ・子どもができると，夫婦の間にも思いがけない行き違いがいろいろできてくることを経験した。
- ・子どもができたのに，夫は助けてもくれないし，手伝ってもくれない。
- ・夫は子どものことにあまり興味がないようである。
- ・子どもができてから，夫の両親や家族との間に気詰まりな問題や意見の対立が目だってきた。
- ・子どもの育て方やしつけの方針について，私と家族の考え方にはかなり開きがある。